

「夜離れ」「かれがれ」の再検討

——『源氏物語』を中心に——

河 村 裕 美

【要旨】『源氏物語』における「夜離れ」「かれがれ」についての再検討を行った結果、「かれがれ」は男女間の問題を越えた義父の視点においても用いられており、「かれがれ」を受けた女性心理は一切無視されていることがわかった。それに対して「夜離れ」は、男女の視点でのみ用いられており、それを巡る男女を悲しませている。

自分の元から他の女性の元へ男が通っていく際には「夜離れ」が用いられ、「かれがれ」は用いられていなかった。そのため「かれがれ」の使用から男の深い愛情を読み取ることはできない。ここに「夜離れ」と「かれがれ」の用法の違いを見ることができると。

また『源氏物語』の紫の上においては「自信」が、六条御息

所においては「自尊心」が前提となっており、「夜離れ」「かれがれ」が成立するための条件にそれぞれ違いが認められる。だからこそ物語で「夜離れ」「かれがれ」が用いられた場合、そこから女性心理や人物造型を読み取ることができるのである。

はじめに

先に、a 「源氏物語」「夜離れ」考——紫の上の人物造型として——、b 「夜離れ」の再検討——八代集を中心に——、c 「夜離れ」「かれがれ」の再検討——藤原道綱母を中心に——という題で『源氏物語』や八代集、『蜻蛉日記』を中心に「夜離れ」「かれがれ」について論じたことがある。^{〔1〕} かつて「夜離れ」「かれがれ」は、離婚語とされていた。

それに対して私見では『源氏物語』における「夜離れ」は、「愛されるがゆえの夜離れ」という特殊表現として用いられていることを論じた。次に八代集においては、同じ「夜離れ」であつても、詞書と和歌、作者の性別によつて「夜離れ」に込める想いが異なっていることを明らかにした。さらに『後拾遺和歌集』の詞書と『蜻蛉日記』の地の文を照らし合わせたところ、「夜離れ」が用いられた場合、「歌徳説話的構成」となっているのに対し、「かれがれ」が用いられた場合は和歌で兼家の愛情を取り戻すことができないことを論じた。

このように、どの作品を資料として分析するかによつて、「夜離れ」は意味を変えていったのである。そこで、本稿では、「かれがれ」と併せて再度『源氏物語』における「夜離れ」について検討したい。

一、「かれがれ」考

——登場人物の視点を通して——

『源氏物語』において、「夜離れ」は八例、「かれがれ」は五例用いられている。これは、物語においてほとんど用例の見られない「夜離れ」と「かれがれ」を、作者が積極的に用いてい

る、と考えて間違いないだろう。先の論文 a では『源氏物語』の「夜離れ」に関しては紫の上の人物造型を中心に論じたが、「かれがれ」は紫の上に対して一例も用いられていない。

「夜離れ」が「愛されるがゆえの夜離れ」として用いられたのであるならば、「かれがれ」も当然、そのように用いられていると考えられるのではないだろうか。本章では、『源氏物語』における「かれがれ」について以下、考察を行いたい。

まず、「かれがれ」の用例数と用いられている巻は、「帚木卷」「夕顔卷」「葵卷」が各一例、「賢木卷」が二例⁽²⁾であり、その用例が以下四例である。⁽³⁾

1、一日二日も見えたまはず、離れ離れにおはせしをだに飽かず胸いたく思ひはべりしを、朝夕の光失ひてはいかでか永らふべからん。
(葵卷 六六頁)

2、かの四の君をも、なほ離れ離れにうち通ひつつ、めざましうもてなされたれば、心とけたる御婿の中にも入れたまはず。
(賢木卷 一三九頁)

3、この人亡せて後、いかがはせむ、あはれながらも過ぎぬるはかひなくて、しばしばまかり馴るるにはすこしまばゆく、艶に好ましきことは目につかぬところあるに、う

ち頼むべくは見えず、かれがれにのみ見せはべるほどに、
忍びて心かはせる人ぞありけらし。(帚木卷 七七頁)

4、気色ばみて、ふと背き隠るべき心ざまなどはなければ、
かれがれにと絶えおかむおりこそは、さやうに思ひ變る
こともあらめ、心ながらも、すこし移るふこともあらむ
こそあはれなるべけれどさへ思しけり。

(夕顔卷 一五五頁)

「かれがれ」となる行為をした男、受けた女として描かれて
いるのは、源氏↓葵の上(用例1)、三位中将↓右大臣家四の
君(用例2)左馬頭↓女(用例3)、源氏↓夕顔(用例4)で
ある。

まず注目したいのは、用例1である。ここでは、源氏の葵の
上、延いては左大臣家への訪れが「かれがれ」となっていたこ
とを、葵の上亡き後に左大臣が回想している。「夜離れ」は全
て地の文で用いられていたものの、この用例は会話文の中で用
いられている。また、これは葵の上と源氏の関係を左大臣が女
性側の父親、義父としての立場から不満を持ち、「かれがれ」
を嘆いているのである。葵の上は源氏の正妻であるため、他
どの女性よりも多く通っていくことが当然であった。それがで

きていなかったからこそ、左大臣は源氏の「かれがれ」を嘆い
ているのである。八代集の詞書において「夜離れ」は男が女に
対して、言葉や状況面で「期待」をさせたときに用いられる表
現であった。用例1も同様に「期待」することによって浮上し
てくる表現であると考えられる。ここでも左大臣は葵の上の正
妻という立場から「期待」をしているからである。しかし、女
性である葵の上の立場や心理は一切問題にされていない。これ
は「夜離れ」と大きく異なることに思われる。

用例2では、その後の「心とけたる御婚の中にも入れたまは
ず。」という表現に注目したい。この用例は夫としての三位中
将ではなく、婿としての三位中将に向けて右大臣が用いている。
つまり、用例1と同様、義父の視点から用いられている表現な
のである。「夜離れ」の用例は全てが女の元に通つて来る男に
焦点を当てていた。そうなると、これら「かれがれ」の用例は
単に男と女だけの問題として解釈することはできない。源氏と
葵の上、三位中将と右大臣家四の君は双方政略結婚であり、そ
こに恋愛感情はない。また、左大臣家と右大臣家是对比的に描
かれており、政治的問題も絡んで用いられている。つまり葵の
上と右大臣家四の君はどちらも正妻ではあるものの、愛される

がゆえに用いられていた「夜離れ」と同種の表現として考えることはできない。この用例1、2は、「夜離れ」を受けた当事者の表現ではないので、婿としての務めを果たしていないことに対する批難の意味合いが強いのではないだろうか（離婚と無縁であることはいうまでもない）。

次に用例3である。これは、雨夜の品定めにおいて、左馬頭が自身の体験について語る場面である。これも用例1と同様、会話文において用いられており、過去を回想し、自身の行動を「かれがれ」としている。この用例は唯一自身の行動を「かれがれ」としており、他の用例との違いが見られる。

最後に、用例4である。用例4において、源氏は夕顔に執心していた。そのため、「かれがれ」は、それが起こることを仮定している源氏の心内文として用いられており、用例1、3同様、地の文で用いられていない用例であることが分かる。『源氏物語』における「かれがれ」の四例中、三例が会話文と心内文に用いられている。対して、「夜離れ」は全て地の文で用いられており、全て作者の視点から用いられているのである。また、用例1は「おはせし」、用例2は「うち通ひつつ」、用例3は「見せはべる」とその後にあるものの、用例4は、「と絶え

おかむ」と記されている。つまり、用例4以外は通いが「かれがれ」であるのに対して、用例4は途絶えが「かれがれ」ということになっており、意味が反対に用いられているのである。

「かれがれ」も『角川古語大辞典』によると、一義の意味は「人の行き来や歌のやりとりが絶え間がちであるさま。ことに、男女の間柄が疎くなっているさま。男の通うのがとだえがちであるさま。」⁽⁴⁾である。通常ならば、男女間の問題を描くはずであり、用例1から4も表面的に見ると男女間の問題を描いているように考えられがちである。しかし、もし男女間の問題のみに焦点を絞っているのであれば「夜離れ」同様、女性心理を描く必要があるのではないだろうか。それを作者が『源氏物語』において描いていないのであれば、それはもはや「かれがれ」は男女間とは別の表現と解釈せざるを得ない。やはり、「夜離れ」と「かれがれ」を同義の表現と解釈することはできないようだ。次章では、前稿aで扱った『源氏物語』における「夜離れ」の全八例を再度検討し、考察を行いたい。

二、「源氏物語」における男女の悲嘆

——「夜離れ」の新考察——

慰めたまひける。

(若菜下巻 一七八頁)

であった。

用例5は源氏と六条御息所に関する「夜離れ」であるが、こ

『源氏物語』正編における「夜離れ」の用例は、

5、女は、いとものをあまりなるまで思ししめたる御心ざま

にて、齢のほども似げなく、人の漏り聞かむに、いとど

かくつらき御夜離れの寝ざめ寝ざめ、思ししをるること

いとさまざまなり。

(夕顔巻 一四七頁)

6、そのころは夜離れなく語らひたまふ。

(明石巻 二六三頁)

7、二条院に夜離れ重ねたまふを、女君は戯れにくくのみ思

す。

(朝顔巻 四八八頁)

8、尚侍の君、夜離れを何とも思されぬに、かく心ときめき

したまへるを見も入れたまはねば、御返りなし。男胸つ

ぶれて、思ひ暮らしたまふ。

(真木柱巻 三六七頁)

9、三日がほどは、夜離れなく渡りたまふを、年ごろさもな

らひたまはぬ心地に、忍ぶれどなほものあはれなり。

(若菜上巻 六三三頁)

10、その御あつかひになん、つれづれなる御夜離れのほども

こでは源氏が夕顔に執心しており、六条御息所への通いが「夜

離れ」となっている場面である。源氏は、六条御息所の元に

「夜離れ」となっていると夕顔に惑溺していた。「一夫多妻

制」の時代において、源氏ほどの身分の男が一人の女のみを愛

し、通い続けるということは考え難い。そうになると、「夜離れ」

は別の女の存在が浮上することで問題となる表現であると考え

ることができのではないだろうか。紫の上の元に「夜離れ」

となっていたとき、源氏には朝顔の君や女三宮の存在があった。

また、鬚黒と玉蔓が「夜離れ」となっていたとき、鬚黒は北の

方の元にいたことから、「夜離れ」はやはり、ただ自分の元

に通って来ないだけではなく、他の女の元に通っていることに

重さが置かれているのである。

源氏が六条御息所の元に「夜離れ」をしていたとき、正妻で

ある葵の上の元にも「大殿には絶え間おきつつ、」(夕顔巻 一

四六頁)とあるように「夜離れ」をしていた。六条御息所が

「夜離れ」を嘆いているとき、葵の上も「恨めしくのみ思ひき

こえたまへり。」(夕顔巻 一四六頁)とあることから、「夜離れ」を恨めしく思っていたことが分かる。つまり、「夜離れ」という表現だけを見ると、葵の上は源氏が通つて来ない状況で「夜離れ」と認識しておらず、それを嘆いていると考えることはできない。しかし、文学作品である以上、表現だけで考察するのはなく、その状況を考える必要がある。葵の上も他の女性と同様、「夜離れ」状態を嘆いてはいたものの、正妻という立場から源氏に直接抗議をすることはできなかった。これは、『蜻蛉日記』の道綱母と時姫に通じるように思われる。このように、立場によって「夜離れ」の持つ意味が異なっていることが分かる。

用例6は、源氏が京へ召還される直前に一時的に明石の君との「夜離れ」がなくなった場面であるが、明石の君にとって源氏が「夜離れ」なく通うのはこのときが最後となる。源氏が京に戻り、明石の君を呼び寄せても、源氏が明石の元に「夜離れ」なく通うことは二度とないため、明石の君にとってこのときは人生最後の思い出となる。また、本文に「夜離れなく」とあることから、それまでは、明石の君に「夜離れ」状態であったことが分かる。その後、明石の君は懐妊するのであるが、こ

の件に関しては、『源氏物語の鑑賞と基礎知識』(『宿木巻(前半)』)の鑑賞欄に、

なお、明石の君の例は「夜離れなく」とあるが、これに続いて懐妊の記事が見え、しかも源氏が都に召還される折であることから、中の君の懐妊・「夜離れ」は明石の君の造型にも通い、深刻な事態を予想させる。(一六三頁)

とある。しかし、「夜離れ」と懐妊の関係に必然性を求めることは可能なのだろうか。確かに男が女の元に通う頻度が多ければ多いほど懐妊する可能性は高まるだろうし、全く通わなければ懐妊することはない。ただ源氏は紫の上の側に最も居たのも関わらず、紫の上が懐妊することはなかった。通う頻度は少なくとも懐妊することとはあり得るし、逆に毎日一緒にいても懐妊するとは限らない。つまり、通う頻度と懐妊を合わせて考えることは難しいように思われる。

次に、用例8である。これは、北の方が鬚黒の大將に灰を投げかけて、玉鬘のもとに通うことができなかった場面である。「夜離れ」が用いられた直前には、

「心さへ空にみだれし雪もよにひとり冴えつるかたし
きの袖

たへがたくこそ」と白き薄様に、つつやかに書いたまへれど、ことにをかしきところもなし。手はいときよげなり。

才賢くなどぞものしたまひける。(真木柱卷 三六七頁)とある。この和歌から、鬚黒が玉鬘に会えない「夜離れ」を嘆いていることが分かる。また、ここでは鬚黒の和歌に関して地の文では何の評価もされておらず、筆跡などの分析がされているのみである。そして、玉鬘はこの鬚黒の和歌に返歌をしておらず、鬚黒は「胸つぶれて」とあるように、何の反応もないことを嘆いているのである。

次に、鬚黒はそれまで北の方と同居しており、北の方の元から玉鬘の元へと通っていたのであるが、他の用例とくらべ用例8は異色なもののように感じられる。他の「夜離れ」の用例は、女性視点に立った「夜離れ」であった。本来ならば、ここでも「夜離れ」を受けている玉鬘に視点を置いて用いられるはずである。それにも関わらず、ここでは「夜離れ」を何とも思っていない玉鬘と「夜離れ」を嘆く鬚黒の視点に立つて用いられている。『源氏物語』において「夜離れ」を受けた女性は玉鬘以外全員、「夜離れ」を嘆いていた。しかし、玉鬘は何とも思わずに、逆に鬚黒の方が玉鬘に会えない「夜離れ」を嘆いている

のである。用例8以外の全用例で「夜離れ」を受けた女性が嘆いているのであれば、作者はやはり、意図的にここで「夜離れ」を用いたものであると考えられる。このように用例8は『源氏物語』における「夜離れ」の用例の中でも特殊な用いられ方をしている。他と違って用いられた「夜離れ」であるならば、作者がここで「夜離れ」を用いた意図をくみ取らねばならない。

さて、用例8の特殊性は次にある用例11との比較のために用いられているのではないかと思われる。用例11も、男側の視点に立った「夜離れ」である。しかし、鬚黒と玉鬘にはかなりの温度差があるのに対し、匂宮と中の君に温度差はない。つまり、鬚黒から玉鬘の滑稽とも取れる「夜離れ」が匂宮と中の君の愛を引き立たせているのである。

また、直接的ではないにせよ、源氏も「夜離れ」を嘆いている^⑤。源氏が「夜離れ」を通して紫の上への愛情や素晴らしさを再認識したことは前稿aで述べた通りである。そうすると『源氏物語』において「夜離れ」を行った男は全員「夜離れ」を嘆いていることになる。八代集の詞書において「夜離れ」は、主に女性側の視点に立ったものであった。しかし、『源氏物語』

における「夜離れ」は男女双方の視点に立った表現である。これは作者が「夜離れ」を巡る男女の悲しみをより効果的に表現するために、意図的に用いたのであると考えられる。

また、この玉鬘の「何とも思されぬに」という感情から、女三宮の「姫宮は何とも思したらぬを」（若菜上巻 八六頁）が想起される。ここでも女三宮は源氏の「夜離れ」を何とも思っていないのに対し、「御後見どもぞやすからず聞こえける。」（若菜上巻 八六頁）とあるように女房などが源氏の「夜離れ」を嘆いているのである。「夜離れ」は「かれがれ」のように男女以外の視点では用いられていないものの、単に男女間の問題のみを描いている表現ではないということがこれより分かる。平安朝において結婚は当人同士の問題ではない。それは前章の「かれがれ」の検討から明らかであるが、女房や家主といった家の問題を多分に含んでいるのである。そして、平安朝における結婚は時に当人の気持ちを見殺しして行われるものである。それが、用例8における「尚侍の君、夜離れを何とも思されぬに」という記述に表れていると考えることができる。

最後に、宇治十帖において、「夜離れ」は二例見られる。その用例は、

11、人々いたく声づくりもよほしきこゆれば、京におはしまさむほど、はしたなからぬほどにと、いと心あわたしげにて、心より外ならむ夜離れをかへすがへすのたまふ。
（総角巻 二八三―二八四頁）

12、ここかしこの御夜離れなどもなかりつるを、にはかにい

かに思ひたまはんと心苦しき紛らはしに、

（宿木巻 三八六頁）

であるが、この用例はどちらも匂宮から中の君に対する「夜離れ」である。『源氏物語』における「夜離れ」の全用例の八例中三例が紫の上に用いられていたのに対し、中の君には二例用いられている。

用例11の「夜離れ」は、結婚三日目の夜半に匂宮が中の君のもとに通つて来た後の場面である。何度も述べているように、新婚当初はお互いの愛を育む期間でもあるため、通常は「夜離れ」とならない短期間の別れでも「夜離れ」となる。しかも、ここは結婚三日目の夜であり、宇治では女房なども匂宮の訪れを心待ちにしていた。しかし、匂宮の到着は遅れ、宇治に到着したのは夜半であった。この後匂宮と中の君は、「中絶えむものならなくに橋姫のかたしく袖や夜半にぬらさん」（二八四

頁)・「絶えせじのわがたのみにや宇治橋のはるけき中を待ちわたるべき」(二八四頁)という和歌を詠み合ったのである。こ

こでの「夜離れ」は匂宮、つまり男が感じている「夜離れ」である。先述した通り、これは用例8と酷似している。しかし、玉鬘は髭黒の「夜離れ」を何とも思っていないのに対して、中の君は「絶えせじの」歌から分かるように、匂宮の「夜離れ」を悲しんでいる。つまり、この「夜離れ」を匂宮、中の君ともに嘆いているのである。前稿りで明らかにしたように、和歌に用いられた「夜離れ」は、男性心理を一切問題にしていなかった。「夜離れ」を男性心理とともに用いている点で『源氏物語』の特異性が認められる。

用例12にも、用例11のように緊迫感が見られるものの、その緊迫感の質は違う。ここでは、匂宮が夕霧の娘である六の君と婚約する。そこで、用例12のように今まで「夜離れ」がなかった中の君を「夜離れ」に慣れさせるためにあえて通わない日を作る。しかし、六の君の身分を考えると、中の君の心中は穏やかでない。いくら「夜離れ」に匂宮が慣れさせようとしても、中の君は決して「夜離れ」に慣れることはないのである。ゆえに、中の君は、「ただつらき方にのみぞ思ひおかれたまふべき」

(宿木卷 三八六頁)とあるように、恨めしく思っているのである。

このように、「夜離れ」は一方向に意味が固定できる表現ではなく、女性によって様々な意味を持つ表現である。しかし、『源氏物語』において、「夜離れ」は女性のみが嘆く表現ではなく、源氏や鬘黒、匂宮のように、男も「夜離れ」を嘆くのである。男が女の元に通って来ない以上、「夜離れ」の責任は男にあるように思われるが、『源氏物語』において、男は外的要因によって「夜離れ」が起こっており、それゆえに「夜離れ」を嘆くのである。このように、「夜離れ」は『源氏物語』において、「夜離れ」を巡る男女を悲しませる。次章では、その中の女性心理に着目して考察を行う。

三、「源氏物語」における女性心理

——「夜離れ」を通して——

これまで、『源氏物語』における「夜離れ」「かれがれ」を通して、その用例検討、考察を行った。本章では、その中の女性心理に着目して『源氏物語』における「夜離れ」「かれがれ」を持つ意味について考察を行いたい。

さて、『源氏物語』において「夜離れ」を基に女性心理について考察を行うとき、「一夫多妻制」を無視することはできない。「一夫多妻制」であるということは同居妻と別居妻がいるのであるが、同居妻から見た「夜離れ」とは自分の元から他の女の元に通う男を送り出すことであり、別居妻から見た「夜離れ」は自分の元に男が通って来ないことを指す。つまり同じ「夜離れ」であってもその性質を異にするのである。

前稿 a で『伊勢物語』第二十三段の大和の女の悲しみを紫の上は継承していると述べた。それは、自分の元から男を河内の女の元へ送り出すという点に因るものであった。通常、「夜離れ」「かれがれ」から女性心理を考察すると、男が通って来ない女に焦点は絞られるだろう。しかし、男から通われない女よりも、自分の元から他の女の元へ送り出す女の悲しみの方がはるかに大きく、その悲しみは計り知れない。それは、自分の元に男が通って来ないことの悲しみと比較することはできないだろう。源氏は紫の上と、鬚黒も北の方と当初、同居していた。そして、北の方の元から玉蔓の元に通っていたのである。平安朝において、男女間における愛情の深さは「夜」一緒にいることができるかどうか大きな問題であった。それは、「夜

離れ」という表現があって「昼離れ」という表現がないということからも明らかである。また、道綱母が『蜻蛉日記』において、

さながら六月になりぬ。かくて数ふれば、夜見ること三
十余日、昼見るとは四十余日になりけり。

(中巻・天禄元年五月〜六月 一九二頁)
とあり、「夜見ること」を第一に書いていることから、「夜」一緒にいることの重要性が分かる。このように「夜」一緒にいることの重要性を述べている道綱母であるが、道綱母自身も夫兼家を自分の元から町の小路の女の元へ送り出している。その用例が、

これより、夕さりつかた、「内裏にのがるまじかりけり」
とて出づるに、心得で、人をつけて見すれば、「町の小路
なるそこそこになむ、とまりたまひぬる」とて来たり。

(上巻・天曆八年十月〜九年九月 一〇〇頁)
である。この後、道綱母と兼家は「なげきつつひとり寝る夜のあるまはいかに久しきものとかは知る」(一〇〇頁)・「げにやげに冬の夜ならぬ真木の戸もおそくあくるはわびしかりけり」(一〇一頁)の和歌を送り合っている。ここからも、自分

の元から別の女の元に通われる女の悲しみを見ることができるとは、道綱母は兼家と同居していないため、同居妻の真の悲しみを理解することはできないだろう。

また、「北の方―鬚黒―玉鬘」という構造が「紫の上―源氏―女三宮」という構造に酷似していることに着目したい。これは、目の前の夫が新妻の元に通うという点で同形と考えることができる。先述した通り、この構造は『伊勢物語』第二十三段と同様の構造と考えることができる。しかし、『伊勢物語』が「歌徳説話的構成」であるのに対し、『源氏物語』においてそのような構成を見ることはできないものの、目の前から男が別の女の元に通う悲しみを見ることが可能である。また、鬚黒は北の方から玉鬘に気持ち移っているのに対し、源氏は女三宮に気持ちが移っていないばかりか、女三宮との結婚を通して紫の上の素晴らしさを再認識している。このように同じ構造でありながらも、男の気持ちの変化に違いが見られることが分かる。そして、「北の方―鬚黒―玉鬘」という構造が紫の上と源氏の愛をより引き立たせていると考えることができるのである。

さて、紫の上や中の君が「夜離れ」をする源氏や匂宮にどれほど不満を持つとも、紫の上は源氏を、中の君は匂宮を頼る

しかない。それは、いくら源氏や匂宮の「夜離れ」を嘆き悲しんだとしても鬚黒の北の方のように実家に帰ることができないためである。そのような危機迫った状況という点でも紫の上と中の君は類似点が見られる。

このように類似点が見られる紫の上と中の君であるが、前稿aで述べたとおり、紫の上と中の君は子どもの有無という点で大きな違いが見られる。当時、平安朝において子どもの有無は大きな問題であった。子どものいない女性で正妻になることは稀である。また、子どもの存在は女性に自信を与える。まして、紫の上のように子どもが好きな女性であればなおさらだろう。しかし、紫の上は最後まで子どもを懐妊することはできなかったため、明石の姫君を養女としたが、いくら明石の姫君を養女としても、自分の本当の子どもではない。ゆえに、紫の上は源氏以外に頼ることはできないのである。前稿aで紫の上の「夜離れ」の悲しみは中の君に継承されていると述べた。しかし、今回改めて再検討をする中で、紫の上における「夜離れ」の真の悲しみは中の君には継承されていないのではないかと考える。確かに、現在でも子どもの有無は女性にとって大きな問題であるが、平安朝における女性の悲しみと質を異にする。

つまり、紫の上と中の君は状況面では類似点が多々見られるものの、両者は「夜離れ」を通じた後の結果で相反する立場に置かれるのである。

次に、男が通って来ない状況を「夜離れ」と認識し嘆くのは、六条御息所、紫の上、中の君であるが、紫の上は源氏に、中の君は匂宮に最も愛された女性であった。最も愛された時期があったからこそ、その後起こった「夜離れ」を嘆き悲しみ、苦しむのである。末摘花や花散里はそのような状況にならなかつたために、「夜離れ」という状況を何とも思っておらず、むしろ問題にすらなっていない。そして、六条御息所は、元東宮妃であり、源氏より年上であるという「自尊心」があった。その「自尊心」ゆえ「夜離れ」を嘆き悲しみ、苦しみ、物の怪となつたのである。

また、用例7と9、10では七、八年の差がある。用例7は結婚十年目であるため、恋愛中期、用例9、10は恋愛後期と考えることができる。同じ紫の上に対する「夜離れ」でもこの三例を同種の表現と考えることはできない。「夜離れ」は男への「期待」が前提となつて起る表現であつたものの、紫の上に対するこれら三例は全て最も愛された女性という安定した「自

信」が前提にある表現のように思われる。源氏が明石に移住したとき、本来ならば結婚後すぐであるため、明石の君の元に「夜離れ」なく通うのが当然であつた。それにも関わらず、不在の紫の上のことを想い、源氏は明石の君の元へ通わなかつたのである。そのような「自信」が紫の上の「夜離れ」を意識させたことは間違いないだろう。このように考えると中の君が「夜離れ」と認識したのは全て恋愛初期であるため、ここでも紫の上と中の君には相違点が見られる。前稿cで考察したように、結婚当初に男が通って来なければそれは「夜離れ」と認識されることが多かつた。そうすると、用例11が「夜離れ」と認識されることにも納得がいく。この点から、中の君の「夜離れ」に対する意識は、藤原道綱母と通じるように思われる。それは、道綱母は自身の詠んだ和歌や『蜻蛉日記』において「夜離れ」を用いていないものの、『後拾遺和歌集』の詞書では、結婚当初に用いられていたためである。しかし、紫の上ほどの「夜離れ」も恋愛中期・後期に起こっている。やはり、紫の上における「夜離れ」の前提には「自信」があることが分かる。

以上考察してきたように、「夜離れ」はそれぞれの女性に

とつてそれぞれの意味を持つ多様な表現であるということが分かる。ゆえに、「夜離れ」はそれぞれの女性の心理や人物造型を考える上で重要な表現なのである。また、「夜離れ」「かれがれ」はそれぞれの立場によって持つ意味も、その重みも違う。「一夫多妻制」の時代であるのだから、「夜離れ」が起こることは必然である。かつて「夜離れ」や「かれがれ」となる行為をしたであろう左大臣や右大臣も義父の立場になると自分の娘の元に常にいることを望む。しかし、それは愛情の独占を願うのではなく、政治的意味合いを多分に含んだものである。つまり、女と男、そして義父とそれぞれ違った用いられ方がされているのである。従来の和歌や詞書における「夜離れ」は女性側の視点に立った表現であり、多く男側の視点には立っておらず、義父の視点に立った表現は一例も見られなかった。やはり、『源氏物語』において「夜離れ」「かれがれ」は本来持つ意味を越えて用いられており、意味の拡大が認められる。

まとめ

以上、『源氏物語』における「夜離れ」「かれがれ」について再度、検討、考察を行った。まず、『源氏物語』における「か

れがれ」は、男女間の問題を超えた義父の視点においても用いられており、「かれがれ」を受けた女性心理は一切無視されている。それに対し、「夜離れ」は男女の視点のみで用いられており、それを巡る男女を悲しませた。また、『源氏物語』における「夜離れ」は会話文や心内文では使用されておらず、地の文においてのみ用いられていた。そのように考えると、「夜離れ」は第三者が用いる表現だと考えることができそうであり、和歌の詞書において「夜離れ」の用例が異常に多いことにも納得がいく。

加えて、自分の元から他の女の元へ男が通って行くということにも「夜離れ」が用いられ、そのような状況は「かれがれ」では一切用いられておらず、「かれがれ」から男からの深い愛情といった心理を見ることはできない。「かれがれ」はやはり、「夜離れ」と比べ、愛情面に関して一段階落ちる表現であるということが認められた。

最後に、『源氏物語』において、「夜離れ」を通してみると「北の方―鬚黒―玉鬘」という構造が「紫の上―源氏―女三宮」という構造に酷似していることが分かる。この構造は『伊勢物語』第二十三段と同様の構造と考えることができるものの、

『伊勢物語』が「歌徳説話的構成」であるのに対し、『源氏物語』においてそのような構成を見ることはできない。しかし、目の前から男が別の女の元に通う悲しみを見ることは可能であるため、「夜離れ」は、女性心理や人物造型を考える上で重要な表現である。和歌や詞書において「夜離れ」「かがれ」は男からの「期待」が前提となっているのに対し、『源氏物語』の紫の上においては「自信」が、六条御息所においては「自尊心」が前提となっていた。このように「夜離れ」「かがれ」が成立するための条件についてそれぞれ違いが見られた。だからこそ物語の中で「夜離れ」「かがれ」が用いられた場合、女性心理や人物造型を読み取ることができるのである。

〔注〕

- (1) 河村裕美 a 『源氏物語「夜離れ」考——紫の上の人物造型として——』同志社女子大学日本語日本文学22・二〇〇一年六月、b 『夜離れ』の再検討——八代集を中心に——』同志社女子大学日本語日本文学24・二〇〇二年六月、c 『夜離れ』「かがれ」の再検討——藤原道綱母を中心に

に——』同志社女子大学日本語日本文学26・二〇一四年六月。

(2) 「賢木卷」の一例は、

秋の花みなおとろへつつ、浅茅が原もかがれなる虫の音に、松風すごく吹きあはせて、そのことも聞きわかれぬほどに、物の音ども絶え絶え聞こえたる、いと艶なり。
(賢木卷 八五頁)

であるが、この用例は、『新編 日本古典文学全集』では浅茅が原の「枯れ枯れ」と虫の音の「唄れ唄れ」の掛詞とされているため、ここでは対象外とする。

(3) 本論文の用例は、特別に注記しているものを除き全て『新編 日本古典文学全集』より引用する。なお、必要に応じて傍線等を施した。

(4) 『角川古語大辞典 第一巻』によると、「離れ離れ」の意味は、語幹は「かる(離)」の連用形の疊語。和歌では「枯れ枯れ」にかけていうことが多い。①人の行き来や歌のやりとりが絶え間がちであるさま。ことに、男女の間柄が疎くなっているさま。男の通うのがとだえがちであるさま。②虫の音がとぎれとぎれに聞こえるさま。一説には、枯れ衰えている声のさま。③離れ離れになっているさま。あちらこちらにぼつんぼつんとあるさま。

である。

(5) 用例9の後に、

などて、よろづのことありとも、また人をば並べて見る
べきぞ、あだあだしく心弱くなりおきにけるわが怠りに、

かかることも出で来るぞかし、若けれど中納言をばえ思
しかけずなりぬめりしを、
という源氏の心内文がある。
(若菜上巻 六三―六四頁)